

編集後記

当時学長であった谷釜了正先生より命を受けて、2014年度に体育研究所とトレーニングセンターが共同して組織的な学内アスリートサポート構築を開始しました。2015年度には日体大アスリートサポートシステム（NASS）を創設し、具体的なサポート活動を開始しました。今号に掲載されているのはNASS設立より二年目に当たる2016年度の取り組みです。

本誌では一昨年度の取り組みと直接比較することができないのですが、昨年度は一昨年度と比較してサポートの質・量ともに大幅な改善がなされています。昨年度である2016年8月にはリオオリンピック・パラリンピックが開催され、日体大からも体操競技、レスリング、水泳（競泳、飛込、水球、シンクロ）、陸上、新体操、フェンシング、バドミントン、自転車など延べ32名の選手が参加しました。オリンピック・パラリンピアンの中にはNASSによるサポートを受けた選手もいました。NASSの活動が何らかの一助になっていれば我々としてはうれしい限りです。

NASSをめぐる学内環境について、昨年度は非常に大きな出来事がありました。それは日体大競技力の中心であったスポーツ局が改組され、新たにNSSUアスレティックデパートメント（NSSUAD）が構築されたことでした。NSSUADには大きく分けて競技力強化部門と収益部門がありますが、NASSはその競技力強化部門を担うことになりました。さらに競技力強化部門にはハイパフォーマンスセンター、コーチングエクセレンスセンター、トレーニングセンターが位置づけ、NASSが日体大の競技力向上に果たすべき役割はより一層拡大されることになりました。2020年東京オリ・パラに向けてNASSがその力を発揮できる大きなチャンスが到来したという状況といえます。

一方、これまで3年間NASSを通じて競技力向上の活動を行ってきた体育研究所は、競技力研究の推進についてはハイパフォーマンスセンターにその座を受け渡したともいえると思います。学内にはスポーツ文化研究を行うオリックススポーツ文化研究所も設立されていることを思えば、今後体育研究所はその研究分野と目的をより明確にすべき時期に来たといえると思います。体育研究所では様々な研究がなされてきましたが、その多くは健康に関わる研究でした。今後体育研究所は、これまでに人類が経験したことのない超高齢社会に向けて、アスリートに限らないインクルーシブな観点からスポーツを通じたヒューマンパフォーマンスの向上に寄与するような研究を推進すべきではないかと考えています。

中里 浩一